

2018 年度音楽図書館協議会 見学会記録

南葵音楽文庫が〈里帰り〉した姿を見せていただきました

2018 年 6 月 23 (土) 10 時 30 分～15 時 00 分

和歌山県立博物館(和歌山市吹上 1-4-14)

和歌山県立図書館(和歌山市西高松 1-7-38)

昨年 12 月 3 日にプレオープンし、一般公開された南葵音楽文庫を見学する企画でした。

これまで同文庫のたどった道をご存知の方には、このような形で公開される日が来たことに感慨を覚える方もいることと思います。

当日はあいにくの雨天でしたが、集まった 11 名はあの「南葵音楽文庫」を見ることができるとの期待感で、晴れやかな青空の雲のように浮き浮きしておりました。

【県立博物館にて】

和歌山駅からバスでまず県立博物館へ向かいました。さっそく担当の竹中康彦学芸課長がオフィスの奥に案内してくださり、資料運搬用エレベーターに乗ります。エレベーターを降りるとそこは収蔵庫前の広い一室(「写場」)で、中央の畳敷き台の上に、用意していただいた貴重な資料を並べていただきました。事前に閲覧希望をお願いしていた以下の楽譜でした。

自筆楽譜 ベルリオーズ「ロメオとジュリエット」メロディー断片(南葵貴重資料 L-7)、クラマー「ピアノのための新しい実践練習」(同 N-6/24)、ザロモン「ウインザー城」(同 N-3/17) 以上 3 点

筆写楽譜 ウェーバー「魔弾の射手」(同 N-3/38)、パーセル「ディドとエネアス」(同 N-4/41)、「リュート曲集」(同 N-4/42)、「イギリス鍵盤音楽集」(同 N-3/35) 以上 4 点

見せていただきながら博物館の収蔵状況についてお話を伺いました。

南葵音楽文庫の内、特に貴重な手写楽譜などの資料 98 点を収蔵することになりました。「大木コレクション南葵音楽文庫蔵書目録」(1970 刊)の p. 1-12「Manuscript」に記載されている資料群です。これを完全空調の整った施設で保存するために図書館と分けて収蔵することになったとのこと。ここにも利用と保存の相反する問題があります。

これらは一般公開していませんが、月替わりで数点ずつ展示室の特別コーナーに「南葵音楽文庫の音楽資料」として解説付きで展示しています。6 月はヘンデル「サムソン」の手写楽譜(N-3/4 及び N-3/5)を展示していました。

博物館のカフェで和歌山城を望みながら昼食。その後、和歌山県立図書館へ移動。

【県立図書館にて】

13 時すぎに到着。兒玉佳世子図書館長に挨拶後、坂口佐知子サービス課長に南葵音楽文

庫閲覧室へご案内いただきました。



和歌山県立図書館の兒玉館長(右)と音楽図書館協議会
理事長(前)の坂崎東京音楽大学図書館長

南葵音楽文庫については図書館サイトにも詳細が掲載されています。ぜひご覧ください。
紀州徳川家第十六代当主の徳川頼貞侯(1892-1954)が私財を投入して収集した音楽コレクションとして知られていましたが、現在の所有者である読売日本交響楽団から和歌山県に寄託されました。県では資料の整理と保存に取り組み、2017年12月3日プレオープンの運びとなり、同文庫閲覧室に1670冊を設置、一般の利用に供されることになりました。

仁坂吉伸和歌山県知事も受け入れに積極的だったと伺っています。

県立図書館に収蔵されたのは、南葵音楽文庫のうち、博物館に収蔵された特に貴重な98点を除く、およそ2万点の資料です。それらは、主に1917～31年に収集された「旧収蔵」のおよそ1万点、と1970年前後に収集された「新収蔵」のおよそ9千点に分けられ、旧収蔵の資料には、初版楽譜や理論書などをはじめとするカミングス文庫の400点余りの貴重資料や、徳川頼貞侯と親交が深かったオランダのチェロ奏者ジョゼフ・ホルマンの遺族から寄贈されたおよそ1千点のホルマン文庫などが含まれます。

閲覧室には整理の済んだ「旧収蔵」および「新収蔵」の資料の一部が、ほぼ同じ割合で配架されています。音楽図書や雑誌、全集などです。またミニレクチャーに使用された貴重な資料などがガラスケースに展示されています。

閲覧室は、入室手続きは必要ですが、誰でも自由に利用できます。

続いて美山良夫先生からお話を聞きました。

【美山良夫先生の講話を伺う】

美山先生は慶應義塾大学在職中に同文庫の資料を利用されたこともあったとのことで、この度の文庫寄託に関して指導的立場にあり、和歌山県が実施する南葵音楽文庫にかかわる調査研究、教育普及、閲覧支援事業を受託している芸術資源研究所の代表という立場にいらっしやいます。当日は午前ミニレクチャーのためにお出でになっておられましたの

で、特別に講話をお願いしましたところご快諾いただきました。

『寄託された文庫は約2万点です。読売日本交響楽団が長らく預かっていた時期の前にも文庫の充実は諮られていましたので、新旧は半々くらいです。現在3年かけてデータ作成を進めています。

また毎週土曜日の午前中に30分間のミニレクチャーを続けています。これは自分が常々考えていた専門家・学生以外への「音楽資料の活用」「音楽資料の公共性」について、この和歌山で実験したいとの意図を実現したものです。音楽資料はただ好きな者だけのものではなく、市民のものであると考え、参加者が少なくても継続していく覚悟で始めました。

まず音楽資料の公共性、社会性を明らかにすること。そのための語り部を数名お願いして交代でレクチャーしています。この6月末で半年間続けて20数回を数えます。

例として、5月19日に自分がお話した「南葵に残る『第九』資料さまざま」の回をお話します。この部屋のケースに第九の楽譜が6点展示してあります。

Schott版の初版がありますが、メトロノーム記号の記載がないものは日本には2つしかありません。初版のなかでも初刷りであることが判明しています。

また二分冊のベートーヴェン「第九交響曲」自筆ファクシミリがあります。これは1924年出版のもので、ちょうど第九初演100年記念の年になります。当時のドイツの状況を考えると、第1次大戦に敗れドイツ再興の時代に行った出版だったことが分かります。

また実用楽譜はスコア譜、パート譜、不足パートは手書きして、すべてそろっており、さらに合唱パート譜は各声部100部ずつセットで購入しています。これは徳川頼貞侯が「いずれ我が国でも第九を演奏するであろう」との意図で買い揃えていたことがわかります。そして実際に、東京音楽学校で第九初演の際にはこの楽譜が使用されたのでした。まさに慧眼といえます。

その際の書き込みがそのまま残っていますが、よく調べると大変興味深いことが分かります。当時の合唱では出せない高音、低音の音高や歌詞の付け方が変更されているのです。また指揮者の指示と思われるブレスも残っています。ここに展示しているバス・パート100部の多くが書き直されているので、実際に本番ではそのように演奏されたと考えられます。初演については記録が残っていますが録音は存在していないため、このような調査から当時の姿を浮かび上がらせることができるのです。

このように、この文庫の音楽資料が実は身近なものであることを知っていただきたいと考えています。和歌山県民の文化的生活に behavior として貢献する意味を持つと思います。』

さらに「南葵音楽文庫定期講座」を行っていますが、今年度は9月に第3回目を紀伊田辺にある県の施設で開催の予定です。

ミニレクチャーは会場の関係で20名程度までしか入れないのですが毎回満席とのことです。これは、寄託が決まった時点で、98点以外は「図書館に収めるべき」と進言された美山先生のやはり慧眼でしょう。



南葵音楽文庫閲覧室で美山先生からお話を伺いました

【書庫、デジタル作業を見学】

続いて書庫内の収蔵状況を見学させていただきました。木張りの床に貴重資料数千点を保管しています。また旧資料カードは文庫が持っていた木製カードケースごと保管していました。ケース内にバーが無い古い形です。文庫を構成する3大資料の内、カミングス文庫がカード化されています。

書庫内では貴重資料のデジタル化作業を進めていました。自筆楽譜、自筆の書き込みのある楽譜についてはすべてデジタル化する予定とのこと。南葵音楽文庫のリサーチアシスタントのみなさんが作業していました。

修復作業を進める資料も2点見せていただきました。1つはフォリオ版の「マルティニーの音楽史」第1巻(M-7/25)で大変貴重な資料です。この作業には読売日本交響楽団から費用が提供されており、Conservation for Identity社が実際の修復に当たっています。

さらに大切な活動の一つとしてご紹介したいのは「南葵音楽文庫紀要」の刊行です。第1号には美山先生ほか林淑姫氏、篠田大基氏、佐々木勉氏、近藤秀樹氏の論考が掲載されています。



デジタル化作業の実際を見せていただきました

図書館作成の文庫リーフレットに、読売日本交響楽団の小林敬和理事長が、「徳川頼貞氏ゆかりの地である和歌山県に寄託という形で〈里帰り〉できた」と述べておられますが、まさに帰るべきところに帰ってきたという感想を持ちました。仁坂県知事の思いもおそらく同様ではないかと思えます。故郷創生の大きな動きの一つであることは間違いのないのではないのでしょうか。

また美山先生の熱い思いを言葉の端々に感じることができ、この日の雨雲は完全に拭い去られた思いでした。

この度の見学会にご協力いただきました和歌山県立博物館、同図書館の関係者の皆さまに深く感謝申し上げますとともに、これからの南葵音楽文庫の発展をお祈りします。

音楽図書館協議会事務局 渡辺定夫記